

「読書について」—— ジョン・ラスキン『胡麻と百合』訳者序文

(工藤庸子訳)

なるほど友情というものは、個人個人に対する友情というものは、どこか浮ついたものかもしれない。そして読書はひとつの友情である。しかし少なくともそれは、誠実な友情なのであり、その友情の向かう先が死者、あるいは不在の者であるために、いっそう無私無欲で、ほとんど感動を誘う何かがそこに備わっている。さらにそれは、ほかの友情の醜さをなすあらゆるものが、すっかり拭い去られた友情なのである。われわれ生きている者は、考えてみればまだ現役になっていない死者に過ぎないとも言えるのだけれど、それなのに、玄関口であれこれと慇懃なことを言い、ご挨拶を交わし、それをわたしたちは敬意とか感謝とか献身などと呼び、そこにたつぷりと嘘を混ぜこんでいるわけで、これはなんとも不毛で疲れることではないか。「…」読書において、友情は原初の純粹さにたちまち引き戻される。書物が相手ならばお愛想は要らない。書物を友として夕べを過ごすのであれば、本当にそうしたいと望むからである。少なくとも、こ

これらの友については、別れるときに、しばしば未練が残る。別れてしまつてからも、「彼らは私のことをどう思つただろう?」「自分は気が利かなかつただろうか?」「自分は気に入ってもらえただろうか?」と考えたり、さらにはほかの誰かのために自分は忘れられてしまうのではないかと心配したりして、友情を台無しにすることもないだろう。友情のもたらすこうした気苦労は、読書という純粹で平穩な友情の入り口で、ことごとく消え去つてしまうのだ。そこでは敬意なども必要ない。モリエールの言葉に笑うとすれば、それが本当に可笑しいと思うときにかぎられている。もし退屈だと思つたら、遠慮なく退屈そうな顔をすればよいのだし、もう一緒にいるのはうんざりという気分になつたなら、才能も名声もかまうことはない、さっさと元いた場所にお帰り願う。この純粹な友情の雰囲気とは、沈黙であり、それは語らいよりも純粹なのだ。なぜならわたしたちは、他人のために語るのであり、自分自身のためには口をつぐむ。それゆえ沈黙は、語らいのように、わたしたちの欠点や醜い表情を痕跡にとどめることはない。それは純粹であり、まさにひとつの雰囲気なのである。